

## 「私の私」

聖書箇所: マタイによる福音書 7章 24節—27節

「そこで、わたしのこれらの言葉を聞いて行う者は皆、岩の上に自分の家を建てた賢い人に似ている。雨が降り、川があふれ、風が吹いてその家を襲っても、倒れなかった。岩を土台としていたからである。わたしのこれらの言葉を聞くだけで行わない者は皆、砂の上に家を建てた愚かな人に似ている。雨が降り、川があふれ、風が吹いてその家に襲いかかると、倒れて、その倒れ方がひどかった。」

マルティン・ハイデッガーというドイツの哲学者がいました。『存在と時間』という書物で有名です。その『存在と時間』の中でハイデッガーは「現象としての本来的自己」に対する「仮象としての世人的自己」ということを申します。「現象としての本来的自己」とは、本日のこの説教題の「私の私」ということだと私は思っています。本当の私と言ってもよいかもかもしれません。反対に「仮象としての世人的自己」とはこの世の中で何らかの役割を果たすことを期待されてその期待に何とかこたえて生きている私を指すといっただけでしょう。例えば、会社の何らかの部署でコンピューターに向かって日々働いているあなたは、まずは「仮象としての世人的自己」を生きていると言えるでしょう。そして、もしあなたが、給料のためだけにいやいやその仕事をこなす日々を生きているとしたら、正にあなたには「仮象としての世人的自己」しかないということになります。

ところで、以前ある新聞が青年の生活に対する考え方をアンケート調査した結果を載せていました。それによると、「社会的に偉くなりたい」とか「その日だけ楽しければよい」という人も1から2パーセントくらい入るようですが、仕事の手ごたえも欲しいという人も多いようです。すなわち「物質的な豊かさは多少犠牲にしても、充実感のある人生を歩みたい」という人が相当増えてきているらしいのです。これこそ、正に「社会的に偉くなりたい」などという「仮象としての世人的自己」を増幅させようという道ではなく、「現象としての本来的自己」の充実を若者たちが目指している証拠でしょう。

先程お読みいただきましたマタイによる福音書 7章 24節以下 27節までには、しっかりとした岩を土台として家を建てた人と、崩れやすい砂の上に家を建てた人が

登場していました。「仮象としての世人的自己」の増幅のみを心する人生は、正に砂の上に家を建てた人のような人生でしょう。私たちは、是非とも岩の上に家を建てた人のような人生を歩みたいものです。

では岩の上に家を建てるような生き方とは、如何なる生き方でしょうか。それは、もちろん先程のみ言葉の中にちゃんと書いてありました。曰く、「わたしのこれらの言葉を聞いて行う者は皆、岩の上に自分の家を建てた賢い人に似ている。」

「わたし」と仰っているのは、もちろんイエス・キリストです。すなわち、岩の上に家を建てるような生き方とは、イエス・キリストの言葉を聞いて、聞くだけでなく、その意味するところを行う生き方です。ここで、言わずもがな、イエス・キリストが決定的に重要です。キリスト教の福音とは、そのイエス・キリストが私たち一人ひとりに与えられということです。どうかイエス・キリストをいただけてください。するとあなたの人生はしっかりした岩の上に家を建てたような人生になります。それは正に、「現象としての本来的自己」が充実する人生です。イエス・キリストに全てを明け渡すと、不思議なことです。私たちの自己はなくなるどころか、むしろありありと充実いたします。そのようになる時、私たちはこの社会の各部署で自分自身をささげ尽くすように働きながら、私の私が十分にそこで活かしきられているというこの上なき充足を感じることができるでしょう。このようにイエス・キリストは、この世の仕事に100パーセント打ち込みつつ、同時に100パーセント自己を活かしきる生き方を、私たちに与えてくださいます。そのイエス・キリストが、あなたの心に生まれてくださいますようにお祈りいたします。

さて、今申したようなことを、違う言い方で言っている人がいます。ナチの強制収容所で精神科医であった故にガス室で殺されなかったヴィクトール・フランクルという人が戦後間もなく出版した『それでも人生にイエスという』という書物に次のような言葉があります。

「なにをして暮らしているか、どんな職業についているかは、結局どうでも良いことでむしろ重要なことは、自分の持ち場、自分の活動領域においてどれほど最善を尽くしているかだけだということです。活動範囲の大きさは大切ではありません。大切なのは、その活動範囲において最善をつくしているか、生活がどれだけ『まっとうされているか』だけなのです。各人の具体的な活動範囲内では、ひとりひとりの人間がかけがえなく代理不可能なのです。だれでもそうです。各人の人生が与えた仕事は、その人だけが果たすべきものであり、その人だけに求められているのです。」

ここにもまた、「現象としての本来的自己」を充足する道が示されています。それは、「自分の持ち場、自分の活動領域においてどれほど最善を尽くす」という道です。イエス・キリストはそのような生き方をあなたにさせてくださるにちがいありません。

ところで、ハイデッガーですが、彼は立派なことを申しましたが、その実際の人生は残念ながら惨めな側面がありました。彼の人生の最大の汚点は1933年フライブルク大学総長就任と同時にナチに入党したことです。彼の黨員番号は3125894番でした。即ちハイデッガーはナチに加担したのです。そして、彼が当時フライブルク大学総長として、ナチが期待するような振る舞いをしたのは事実です。彼は正に「仮象としての世人的自己」を生きてしまったのです。その時ハイデッガーの「現象としての本来的自己」はどこに行ってしまったのでしょうか。

ハイデッガーのことを言うてはおられません。だからこそ、私たちはこの社会の直中で己を捧げて働く日々において、私の私を生き切るために、何とか本日、クリスマスではありませんけれども、私たち自身の直中にイエス・キリストが誕生してくださることを祈りたいものです。

祈り神様、本日この礼拝に集いしお一人お一人の中にイエス・キリストを誕生せしめてください。この祈り、主イエス・キリストのみ名によって御前にお捧げいたします。アーメン。